

2012（平成24）年度エリザベト音楽大学大学院の

博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条およびエリザベト音楽大学学位規程第12条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏名	李 珍和
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	甲第12号
学位授与年月日	平成25年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	19世紀におけるピアノのための前奏曲の比較研究 ——フンメル、カルクブレunner、ショパン、ブゾーニ、スクリャービンの 《24の前奏曲》を中心に——
学位論文等審査委員	
（総合審査）委員長	教授 片桐 功 教授 柴田美穂 准教授 壬生千恵子
（演奏審査）委員長	教授 柴田美穂 教授 片桐 功 准教授 壬生千恵子 講師 戸梶美穂 非常勤講師 西村順子（山口大学教授）
（論文審査）委員長	教授 片桐 功 教授 柴田美穂 准教授 壬生千恵子 講師 戸梶美穂 非常勤講師 金 東珠（作曲家、元慶熙大学校音楽大学教授）

論文内容の要旨

音楽は、歴史の流れの中でその時代の思想と背景を反映する。したがって、音楽作品を演奏する時は、その音楽を適切に理解し、解釈することが求められる。ひとりの作曲家、ひとつの作品は、その時代とその時代の思潮において位置づけられるべきであり、演奏者自身の感覚による自由奔放な解釈は許されない。つまり、作曲家が作品を通じて伝えたいことは何かを把握するためには作曲家の生涯と作風、そして当時の時代的な背景などに基づいて音楽的特徴を

分析し、作品に接しなければならない。

音楽分析の主な目的はその音楽に近付くことができる体系的な方法を与えることで、これは音楽学者だけではなく、演奏者にとっても重要なことである。ピアノ音楽に対する音楽史的な認識と音楽の理論的な理解が両方伴ってこそ実際の演奏は意味がさらに新しくなり、その音楽の生命力と弾力性を維持することができる。

本論文は19世紀に作曲された《24の前奏曲》を分析してこれを比較検討し、19世紀のピアノ前奏曲の特徴と発展過程を考察した。前奏曲は本来礼拝の前に楽器の調律状態を点検するために演奏した短い楽曲に由来し、決まった形式もなく自由に演奏する即興演奏に近いものであった。以後、前奏曲は古典派時代に至ってソナタ形式が発展し、ほとんど作曲されなくなったが、ロマン派時代に至って過去の音楽とバッハの音楽に対する関心が高くなり、再び発展するようになった。

ロマン派時代に作曲された前奏曲はバッハの《平均律クラヴィーア曲集》のようにフーガと結合した形態の前奏曲があり、独立した前奏曲もあったが、ロマン派時代を代表する前奏曲は独立的形態のものであった。

本研究では、ロマン派時代に作曲された数多い前奏曲作品の中で24の長調と短調で構成された、フンメル《24の前奏曲》作品67、カルクブレンナー《24の前奏曲》作品88、ショパン《24の前奏曲》作品28、ブゾーニ《24の前奏曲》作品37、スクリャービン《24の前奏曲》作品11、の5つの《24の前奏曲》を研究の対象として選択した。これらの前奏曲を1. 調性配列と形式、2. 和声、3. 旋律とリズム、4. 拍子とテンポ、の4つの項目により分析した結果、共通した音楽的特徴を現わしていることが分かった。

第1の調性については、5つの作品が12の長調と短調で構成され、調性配列は規則的な5度循環配列と半音階配列で成り立っていることが分かった。形式は大部分の前奏曲で単一主題が発展する1部形式が多い。このような形式の変化は前奏曲が性格的小品として発展したことも関連があり、性格的小品は主にA-B-Aの3部形式で現れる。

第2の各前奏曲の和声的特性については伝統的な機能和声がよく現れるフンメルとこれをロマン主義的な作曲技法で表現したカルクブレンナーとショパン、新しい和声的試みを見せるブゾーニとスクリャービンとに区分することができる。ショパンとブゾーニ、スクリャービンの作品では半音階的進行と急な転調、複調、非和声音と装飾音を使い、不協和を表現し、和声を豊かにしようとした試みが見られた。しかし、基本的な和声構造は機能和声から外れてなく、このような特徴は終止形でもよく現れており、大部分の前奏曲はV-Iの完全終止を持っていた。

第3の旋律については即興演奏の特性が多く現れるフンメルから、2度と4度間隔の旋律構造による神秘和音に近い色彩感を付与した、スクリャービンに至るまで、それぞれの前奏曲で多様で差別化された旋律が現れていた。

しかし、5つの、5人の作曲家がバッハの影響を受けており、先行する前奏曲作品からも影響を受けたからであったということが明らかになった。リズムは5つの前奏曲に多様な形態で現れていた。

第4の拍子とテンポについても5人の作曲家の特徴がよく現れていた。特にフンメルとカルクブレンナーの前奏曲に現れる即興演奏の特徴は、拍子とテンポの変化から探すことができ、主に非定量の小節に現れていた。非定量の小節はフンメルとカルクブレンナーの前奏曲が前奏と即興演奏の機能を持つことと関係があり、決められた拍子と限定されず、フレーズと小節が拡張される形態で現れる。

このような非定量小節は即興演奏の特性がよく現れ、非定量小節の有無は前奏曲を‘即興演奏’や‘前奏’の機能を持つ作品と、性格的小品としての作品とに分ける際の重要な基準となる。ショパンに至って前奏曲が性格的小品として発展し始めるとこのような拍子特性はますます

消えて、ブゾーニ以後の前奏曲には現れなくなる。

このような結果を基にして、バッハの《平均律クラヴィーア曲集》から発展して来た《24の前奏曲》は、フンメルとカルクブレナーの前奏曲では即興演奏と前奏の機能を持つ楽曲として発展し、ショパンに至って性格的小品として発展して以後、ブゾーニとスクリャービンに影響を与えたことが確認できた。したがって、本研究で扱っている5つの《24の前奏曲》は、お互いに類似する音楽性向を見せており、フンメルとカルクブレナー、ショパン、そしてショパンの影響を受けたブゾーニとスクリャービンまでお互いに有機的関係を持ち、発展を遂げたと言える。

5人の作曲家は先行する作品から影響を受けただけでなく、各人の独自の音楽語法で再創造したため、5つの《24の前奏曲》は作曲家の作曲技法と個性がよく現れ、各作曲家の性向を調べるのに相応しい曲である。したがって、これらの前奏曲を単純に音楽が始まる前に演奏する楽曲と理解するだけではなく、ロマン派時代の性格的小品として認識することが重要であり、演奏者は歴史的流れによる考察と、分析を通じて正しい解釈を基にして作品に接する必要がある。また、19世紀には《24の前奏曲》の他にも多くの作曲家が残した独立的前奏曲があるので、今後も持続的な研究の必要がある。

審査結果の要旨

1. 演奏審査

本研究演奏は、19世紀のピアノ前奏曲についての研究に基づいたもので、各作品の詳細な分析から得られた研究結果を実際の演奏表現へ具現化したものである。ピアノ作品群における前奏曲の位置づけと意味、そして本研究で取り上げている個別作品の分析については、これまであまり研究対象とされておらず、演奏領域の研究としての独自性がみられる。また、分析結果に立脚した演奏発表は、新規性、独自性ともに認められるものであり、研究意義を十分に果たす試みであったといえる。

演奏曲目にはバッハ、フンメル、ショパンが選ばれ、バロックからロマン派への変遷を時系列的に辿ること、および各時代の特徴を比較することが可能なプログラミングであり、本研究発表には相応しい構成がとられていた。他方、演奏実践に対する所感としては、タッチの違い、調性や曲想の違いなど、時代や作曲家ごとの特徴を表現するためのより一層の工夫が望まれた。

バッハ平均律I巻「16番」「17番」は、テンポ設定は良いが、全体にペダルの使用が過多であり、タイによるシンクペーションリズムの表現、フレーズの取り扱い、対旋律2声部の弾き分け、ゼクエンツ部分の音の方向性などに、さらに表現上の探究の余地があるように感じられた。また、楽器の違いを意識して、表現を工夫すべきであった。

フンメルの「前奏曲」Op.67は、テンポ設定、曲間のアプローチは共に良いが、各曲の終結部において、もっと理解して弾かれるべき和音上重要な音への配慮に不足がみられた点が遺憾であり、また、指先の明快なタッチからくる即興性や練習曲的なニュアンスも欲しいところであった。

ショパン「前奏曲」Op.28では、技術的な問題が散見した。発表者はあいにく練習による腱鞘炎を起こしての演奏発表であったが、この前奏曲が、作曲家自身が練習曲として書き始めたものであることを考えると、分析だけでなく、ショパンの要求するテクニックである〈演奏表現としての技術〉に留意して表現研究を進めていくことができれば、このような手首への過負担は軽減されたものと推定される。今後、ショパンの他の作品を多数研究することによって、研究方法や技巧の継続的な習得方法を同時に修得していくことに期待したい。

以上、研究結果に基づく演奏表現の質の向上には、さらなる方法論上の検討と精緻な考査が期待されるが、随所に不断の努力がみられ、今後、より一層のピアノ作品研究および演奏研究への発展が見込めるものと考えられる。これらの審議の結果、李珍和の研究と演奏発表は、博士号授与に値するものとして、審査員全員の合意を得た。

2. 論文審査

本研究は19世紀におけるピアノのための前奏曲、特に《24の前奏曲》を論じたもので、特にフンメル、カルクブレナー、ショパン、ブゾーニ、スクリャービンの5人の作曲家に焦点を絞り、その比較考察を行ったものである。第1章ではピアノ前奏曲の由来や発展過程、第2章で19世紀のピアノ前奏曲の特徴を概略した後、第3章で5人の《24の前奏曲》を各節で個別に取り上げて分析し、第4章でその比較検討を行う。その結果、バッハの《平均律クラヴィーア曲集》から発展してきた《24の前奏曲》は、フンメルとカルクブレナーにおいて即興演奏と前奏の機能をもつ楽曲となり、それがショパンに至って性格的小品として発展し、以後ブゾーニとスクリャービンに影響を与えたことを明らかにしている。

こうした19世紀におけるピアノ前奏曲に関する先行研究は博士論文2点を数えるのみで、これまであまり研究されておらず、テーマとして取り上げる意義は認めてよい。楽曲分析の観点は慣例的手法にとどまり、さらに独自の工夫がほしかったが、5人の《24の前奏曲》を徹底して分析しており、努力の跡は窺える。但し本文では5人の《24の前奏曲》からそれぞればらばらに6曲を選んで説明しているが、その選択の根拠が全く説明されていないところに不満が残った。またそもそもなぜこの5人に絞られるのか、《24の前奏曲》としてはシュテファン・ヘラーのもの(op.81, 1853)、さらには1曲重複があるもののアルカンの《25の前奏曲》(op.31, 1847)をも含めて検討すれば、19世紀における《24の前奏曲》の全貌がもっと明らかになったのではないかというのが、審査員の一致した見方であった。

しかしながらこの論文は留学生の書いた日本語としては十分読みやすく、博士後期課程における3回のリサイタル(レクチャー形式による研究コンサート)でも《24の前奏曲》を取り上げて実践面からも考察を深めてきたことから、実技系の博士論文(DMA)としては十分であろうとの判断に至った。

3. 総合審査

以上の演奏審査と論文審査を総合判断し、この研究は今後この分野を研究しようとするものに十分寄与するであろうことから、全員一致で「博士(音楽) Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。